

世界でもおそらく初めての海上トレイル0大会。実現には奇抜なアイデアと考え抜かれたプランがあった。その源泉となったエネルギーは「素晴らしい感性を持つ障害者に九十九島の海を感じてもらいたい」の一念だ。

九十九島クルージングトレイルオリエンテーリング大会 2005年10月16日  
長崎県佐世保市西海パールシーリゾート



## Sports for All の感動

遊覧船の部参加者 310 名  
(うち障害者 53 名)  
シーカヤックの部参加者 67 名  
(うち障害者 24 名)  
計 377 名

シーカヤックの部に参加した障害者は、その 8 割がカヌー初体験組でしたが、ゴール後の感動は大きな喜びの声として届きました。

遠くは埼玉、千葉、東京、神奈川からの参加者、障害者も大阪から参加がありました。そして九州でも最大の障害者授産施設「太陽の家」からの参加者もありました。

東京から取材に見えた「NHK 情報ネットワーク」の広田綾子さんも、シーカヤックの部、遊覧船の部の両方に参加され、その感動をそのままラジオのようなホームページ「村田幸子の今日も元気で!」で、全国に紹介していただきました。

初めての試みでもあり、課題の克服が万全でなかったこともありましたが、西海国立公園指定 50 周年記念事業とし

て、全国に九十九島の美しさをアピールする機会になりました。特に、県内の障害者施設には、バリアフリーが完備したパールクイーン号を紹介するにはまたとない機会でした。本大会には、行事と重なり参加できなかった大村の障害者授産施設「パールハイム」は、大会前の9月初旬に70名の団体にパールクイーン号に乗船されたとお聞きしました。



## 風をもういちど

「野岳大橋を通ったときの風が心地良かった」

健常者では感じる事ができないものを障害者は感じる・・・そう痛感したのがこのイベントの発端でした。

2003年9月、私たちが開催した「トレイル・オリエンテーリング九州大会」の時のことでした。この大会は関係者のおかげで参加者 924 名、うち障害者の 236 名と、予想以上の成果をあげました。そのときの多くの参加者、特に障害者の声が寄せられました。

「この素晴らしい感性を持つ障害者に、九十九島の海を体感させたら、どんなに感激するだろう」と思ったのが、今回のクルージングトレイル・オリエンテーリング大会を思いついたきっかけです。

九十九島は、長崎県の北部に位置し、島の数は 208、島の密度は全国的にも有名な日本三景のひとつ、宮城県の大崎を上回り日本一とも言われています。その美しさは西海国立公園の人気スポットとなっています。

複雑に入り組んだ地形は、風光明媚な景観とあいまって、トレイル・オリエンテーリングのトレイン(競技会場)として、最高の条件を備えていました。

## パールクイーン号

九十九島には遊覧船「パールクイーン号」が就航しており、船上からのトレイル・オリエンテーリングを試みることにしました。この「パールクイーン号」は、国内の遊覧船随一のバリアフリー設備を持ちます。たとえば、

- ・乗船のとき段差が無い
- ・1F 客室から 3F 甲板デッキまで車いす用のエレベーター(2 台収容)がある
- ・障害者トイレ用がある

この船の存在がクルージングによるトレイル・オリエンテーリングを発想する原点となりました。遊覧船での可能性を模索してゆくなかで、シーカヤックでやればもっと面白いトレイル・オリエンテーリングの楽しさを体感できそうだということから、発展的にシーカヤック案が浮上してきました。



## 夢の実現に向けて

関係者の熱心なバックアップをいただいて、西海国立公園指定 50 周年にあたる 2005 年度に、その記念事業の一環として大会が実施されることになり、第一条件である資金の目処をクリアしました。

実際に、森のスポーツ・オリエンテーリングと海のスポーツ・カヌー競技をどうして合体させるのか? 五里霧中からのスタートでした。

開催地・佐世保には、これまで長年の活動と実績がある海洋スポーツ協会と海洋スポーツ少年団があり、幸いにも、両団体の全面的なご支援を受けられることになりました。

競技種目として、スポーツとして取組む「シーカヤックの部」とレクリエーションの要素を加えた「遊覧船の部」を実施することとし、具体策の検討に入りました。

## 1m フラッグと遊覧船

遊覧船の場合、車いすの障害者の乗船とフラッグの大きさをどうするかということが課題となりました。

パールクイーン号3Fの屋上甲板でしかトレイル・オリエンテーリングができるだけの視界が取れません。

遊覧船は1時間ごとの就航、所要時間は50分。この乗船時間のなかで、車いすの障害者は15分で甲板に上がり、20分間の間に船上からのトレイル・オリエンテーリングに挑戦し、15分で下船準備をすることで遊覧船での時間に見通しがたちました。

甲板への移動時間が15分というのは船内のエレベータの制約によるものです。車いすの障害者を3F屋上甲板に誘導するには、これしか方法はありません。しかしエレベータの定員は2台でした。

甲板に居る20分の間に、船上からのコントロール（フラッグ置く場所）を左舷側、右舷側それぞれ6箇所設定することにしました。

遊覧船の周遊ルートを移動する船上から一つのコントロールで、複数のフラッグが見え始めてから見えなくなるまでの2~3分の間に地図を見て、フラッグの位置を確かめ、答えを出さなくてはなりません。これは予想した以上にスリリングで楽しかったようです。

遊覧船のルートを変えることはできません。船上からコントロールの場所まで距離からして、どうしても通常のフラッグの大きさ（30cm四方）では確認しづらいことがわかり、最終的には1m四方の大きさにすることにしました。



## 安全管理もしっかりと

シーカヤック・トレイル0では、車いすの障害者の乗艇方法、海上での安全確保、コントロール間のルート、DP（ディジジョン・ポイント）の位置などが課題となりました。

シーカヤックは海に浮かんでしまえば安心なのですが、海上での乗艇は、健常者でも慣れないと不安があります。まして障害者にとってそれ以上の不安を持つことは十分予測できました。そ

こで、陸上で乗艇し、海際の階段を利用して作った緩やかなスロープを利用してシーカヤックごと海面に滑り込む形で海に浮かべることにしました。

シーカヤックによるトレイル・オリエンテーリングの海域は

遊覧船の周遊コースを避ける。  
漁船の往来が少ない海域を選ぶ。  
外洋からの風の影響が少ない内海を利用する

これらの条件をクリアするためには海上を500m移動する必要がありました。スタート地点を安全な場所にして、そこまでは一斉に移動することになりました。

シーカヤックは2人艇を使用することとし、参加者のレベル差（参加者の条件は、カヤックの経験者または事前に受講修了者）に合わせて、自信がある人は2人艇に2人の競技者、自信がない人と障害者は2人艇の前部座席に、後部座席にはカヤックのインストラクターを、さらに、2人艇5隻を1グループとし、グループの先頭に誘導を役割とする先導艇と最後部にもう1艇のサポート艇を配して安全を期しました。

さらに、万一海上でのトラブル発生に備えて、警備艇としてボート2隻を配備しました。



## シーカヤック・トレイル0

模索の結果、以下のように競技を実施しました。グループごとに配した先導艇とサポート艇を活用することにしました。

- (1) 最前列の先導艇がコントロールへ誘導し、DPの位置を指示します。その上で、すべてのフラッグが確認できる最も左側地点へ移動し待機します。
- (2) 最後列のサポート艇は、コントロールごとに、すべてのフラッグが確認できる最も右側地点で待機します。
- (3) グループの競技艇は待機している先導艇とサポート艇を海上で結んだラインを移動しながら、解答を

模索します。ラインより内側に近づくことはできません。

- (4) 解答を得た競技艇は、先導艇に終了を告げ、先導艇の位置で、他の競技艇を待ちます。
- (5) グループのすべての競技艇が競技を終了したことを確認できたら、先導艇は次のコントロールへ進み、サポート艇は後を追います

こうすることで、トレイル・オリエンテーリングの競技方法に限りなく近づいた形でシーカヤックによるトレイル・オリエンテーリングが可能になりました。



## 感動をすべての人に

このように、世界でも初めての試み、クルージングによるトレイル・オリエンテーリングへの挑戦は幕を閉じました。しかし、次のステップへのスタートでもあります。

九十九島の美しさがある限り、トレイル・オリエンテーリングの精神“Sports for All（スポーツの感動をすべての人に）”が継承されていく限り、またの機会があることを信じています。



（長崎県トレイル0協会 仲尾勝利）